

"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

2021社内報アワード
ブロンズ賞
受賞

NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
280
Sep. 2021

特集

聖学院の探究学習
理科

巻頭座談会

小中高、聖学院の
理科教員3名による
トークセッション

在校生インタビュー
輝く人たち

卒業生を尋ねて
歩む人たち

関係団体の皆さんにインタビュー
支える人たち





気候変動や新型コロナウイルスをはじめ、少子高齢化やAIによる働き方の変化など今世界はVUCAと言われる予測困難な時代に突入しています。今までの常識が通用せず、何が正しいのか自分で考え判断する必要に迫られています。

社会が目まぐるしく変化していく中、新しく施行された学習指導要領では「探究的」な学習が非常に重視されています。今回の改訂の目標にも「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成する」ことが掲げられています。ここでいう「探究的学習」とは、自ら課題を設定し、必要な情報を収集し、その情報を整理分析して解決策をまとめあげ表現する学習活動です。こ

CONTENTS

特集

01_ 聖学院の探究学習【理科】

小中高、聖学院の理科教員3名によるトークセッション

03_ &Talk

聖学院各校の探究学習【理科】

07_ focus

07_ 生活科、総合的な学習の時間と
ワークショップ
[聖学院小学校]

08_ 理科見学
[女子聖学院中学校・高等学校]

09_ 想像植物ハンティング
[聖学院中学校・高等学校]

10_ 子どもと環境
[聖学院大学]

在校生インタビュー

11_ 輝く人たち [飯尾陸功さん]

卒業生を尋ねて

12_ 歩む人たち [相方芳彦さん]

13_ Seig NEWS

関係団体の皆さんにインタビュー

16_ 支える人たち [高野雅明さん]

17_ 2023年、聖学院は創立120周年を迎えます

120年の軌を歩む

19_ 聖学院歴史探訪 一敬神・奉仕一
[EPISODE #14]

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。
アンケートに回答いただいた方の中から抽選で10名
様に「聖学院オリジナルキーホルダー」をプレゼント!



●有効回答期間
2021年9月22日～11月30日

●当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって
代えさせていただきます。



本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

聖学院の

探究学習

理科

の一連の活動を他の生徒と協働しながら繰り返すことで、主体的で対話的で深い学びが実現するとされています。小学校と中学校では「総合的な学習の時間」、高等学校では「総合的な探究の時間」がこの学習に割り当てられています。

生徒・児童が「なんだらう？」と興味をもち、自ら調べ知識や技能、新しい概念を獲得する力でもあり、教えられるのではなく自ら学ぶ生徒像、児童像がそこにはあります。聖学院は、この学習指導要領の改訂以前から、学院全体として、興味を持ち自ら学ぶ探究的姿勢および横断的な学習を重視してきました。「探究」は生徒主体の考え方であり、一人ひとりを大切にす聖学院だからこそ自然とたどり着いた考え方と言えるのではないのでしょうか。

今号は、探究の原点とも言える身近な自然科学「理科」を題材に、聖学院の探究的学習を見ていきたいと思えます。そこにはどういう想いがあるのでしょうか。



& Talk

特集 聖学院の探究学習【理科】

知識や課題を教員から一方的に与えるのではなく、子どもたちの興味、関心を起点にする聖学院の探究的学習。その考えはテストや知識の獲得にも反映され、さらには未来の持続可能な社会へとつながっています。



佐藤 充恵

教職歴19年。聖学院中学校・高等学校勤務。高校の新クラス設置統括部長。ICEモデルを活用した気づきや発見を促す問いを軸に、理解・考えを深める授業を実践。また、限られた時間内で密度の濃い内容を実践し、学習した内容を有機的につなげていくために、ICT機器をどのように活用していくかを模索しながら授業改善を行っている。



松尾 知実

東京都出身。修士課程中に母校の都内女子校で非常勤講師を務めた後、2015年より女子聖学院中学校・高等学校理科教諭として勤務。主に中学校の生物分野の授業を担当。現在探究ICT委員として、中学生一人一台iPad導入や総合的な学習(探究)の時間の担当をしている。



続橋 みなみ

東京学芸大学初等教育教員養成課程理科専修を卒業し小学校、中高理科教員免許を取得。2021年度より聖学院小学校に入職し、現在3.4.5年生の理科を担当している。

子どもが知的好奇心や概念を獲得するきっかけとなるのは身近な環境にあります。特に自然への興味関心は強く、探究心の目覚めと理科分野は深い関係があると言えます。ではその興味関心をいかに学びへとつなげていくのか、さらには社会で求められる課題解決能力へどう広げていくのか、理科教育の現場に立つ3名の先生にお話を伺いました。聖学院中学校・高等学校(以下聖学院中高)からは佐藤充恵先生、女子聖学院中学校・高等学校以下女子聖学院中高からは松尾知実先生、聖学院小学校からは続橋みなみ先生にお集まりいただきました。

感動や気づきを探究へと昇華させる授業作り

— 授業を作る際、意識されていることや重視されていることは何ですか？

佐藤 私は「わかると変わる」という言葉が好きで、授業を作る時に必ず考えています。植物の特徴を学ぶ時、種子植物、裸子植物という名称が出てきます。しかしそもそも葉のつくりや形、色に共通点があるということはそこに何かしらの理由があるということです。名称を覚えることも大切ですが、普遍的な特徴の背後には本質的な機能があるということを学びとってほしいと思っています。それを通じて生徒がその後、植物を見た時に、ふと疑問を抱いたり、今までと見方が変わって新しいことに気づいてくれたら嬉しいです。そのため授業ごとに本質的な目標の設定とそれによる生徒の変化を考えながら授業を組み立てます。

松尾 私は少し前から問い作りをやっています。中学でも高校でも授業を受けている時、生徒は聞くだけであつたりノートをとるだけになりがちです。そうならず自分の内側から疑問を持ち、問いを立ててほしいと思います。QFT(※)という手法を取り入れました。課題解決には良い問いを立てることが重要であるという考えのもと、問い作りをする手法です。まずテーマを設定し、それに対してたくさん質問を作ります。次にそれぞれの質問の意味や、本質的な問いかどうかなどを精査します。精査を通して、「良い問いや情報が増える問いとは何か」など、問い自体について学びます。最初は質問が浮かばず消極的な生徒も、慣れてくると次々に質問が出てくるようになります。他の授業でも生徒からの質問が増えるようになりました。

続橋 小学校では、まずは「すごいな、不思議だな、楽しいな」と子どもたちが感じた気持ちを大切にしています。そしてその感じたことを、その子だけではなく他の子にも共有できるように心がけて授業を行っています。また子どもたちには理科を、1回ごとの授業や学年ごとで終わる教科ではなく、中学、高校になっても身近にある連続性のある学びとして捉えてほしいと考えています。

佐藤 松尾先生、続橋先生のお話に共通することですが、子どもたちには自分の感覚や気づきを本当に大事にしてほしいですね。私も最初から教えるのではなく、生徒自身が発見できるスタイルをとりたいと思っています。

テストはラベリングではなく、あくまで成長の物差しという意識が必要

— 探究的な学習はテストにも変化をもたらしますか？

佐藤 探究的な授業をやっても、テストが全部知識を問う形だと、結局生徒は探究的な学びを大切だと思わなくなりまう。1割でも良いから生徒たちが今までやってきたことを発揮する問題を入れるようにしています。例えば、成長とともに葉の形が変わる植物については、なぜ形を変えるのか自分なりのストーリーを書かせる問題を出しています。やはり自分の発見から自分なりの考えを作った、自分なりの感覚を持つということはとても重要です。心が動いて、そして見方が変わるといふ流れを作れるよう試行錯誤しています。

松尾 そういふテストの問題、とても面白いですね。

佐藤 ぜひやってみてください。聖学院中高以外の子どもたちがどんな解答をするのか興味があります。この問題は正解があるわけではないですし、自分なりに勉強してきた知識を使っていくら



(上) 聖学院小学校のアサガオの栽培の授業。みんな愛情を込めてアサガオを育てているので、細かな変化にも自然と目がいきます。[2019年撮影]

(右) 左から佐藤先生、松尾先生、続橋先生。子どもたちが主体的に学ぶこと、その学びを力に変えていくことに真摯に向き合っている様子が伺えました。



でもストーリーが作れると思います。

松尾 佐藤先生がおっしゃるように「テストの点数が成績のメインなんじゃないか」ということになる。「課題は知らない、テストの勉強だけしていれば良いんだ」という生徒が出てきます。それはとてももったいないことですし、そもそも知識を吸収するのが得意ならそれを意欲的に使ってほしいと思います。テストに出ない課題にも取り組みたいと思う、またはテストの問題を解くのに課題がいかせる、そういう仕掛けがあると良いですね。

佐藤 テストや成績は評価を固定するラベリングではないということを、生徒に限らず私たち教員も含めマインドセットしていかなければいけませんね。学習到達度を把握した上で、次に何をすれば次の段階へ進めるのかを示している、テストは成長の物差しだということを広く共有していく必要があると思います。

小学校では子どもたちもまだ成績なんて意識しないで、純粹にどんどん学んでる時期ですよ。

続橋 やはりテストは知識を問う側面はあるものの、テストを意識した授業にはしないようにしています。要点は押さえますが、テストや教科書に縛られ過ぎず、子どもたちの思考や興味を広げていけるよう毎回意識しています。また、5年生くらいになると平均点や100点の人数などを聞いてくる子もいます。そういう子には「点数より普段授業で調べたことや、それをど

う思ったか、どう考えたかの方が大事」ということを伝えるようにしています。一方、普段自分から発言しない子は、教員もテストの点数でどう理解しているかを判断してしまいがちです。そうならないよう普段の授業から一人ひとりに声をかけて、今どう考えているのかどう思ったかを聞くようにしています。

小学生の場合、とにかく楽しい時の反応が明確です。自分で手を動かしたり観察する実習をすると、自分から積極的に「ノートにこういうこと書いて良い？」と聞いてくる子が結構います。反応がダイレクトな分、子どもたちの興味や気づきを大切にしたい授業をより一層心がけるようになります。教育実習で行った他校と比べると、聖学院小学校は特に探究の授業や実習が好きな子が多い印象があります。

——聖学院小学校の児童にはどんな特徴がありますか？

続橋 聖学院小学校は、授業をしてみると、子どもたちが自分からやりたいとかこうしてみたいという意見が出てきて、私が予想していた展開を上回る反応を見せます。質問も多く、私が逆に「じゃあこれはどうしてこうなの？」と尋ねることで探究がどんどん進んでいきます。主体的に自分で学んでいる子が多いと感じています。

他の教科の先生方も、児童一人ひとりの初めての気づきやこうしてみたい

という要望を大切に、多少その教科から逸れていても決して否定しません。さらに「こうしてみたら」と促します。子どもたちの発想を「良いよね」と受け入れる柔軟な校風が子どもたちにも伝わっているのだらうと思います。

♪楽しい♪ だけでは深まらない
振り返りが学びの質を上げる

——発達段階が上がり、知識の部分が増えると理科を苦手と感じる子も出てきます。理科を好きでい続けるためには何が必要だと思いますか？

佐藤 学ぶ理由が不明瞭なまま植物の名前を全部覚えるとか分類するなど、知識を情報として与えてしまうと子どもたちは学ぶ意味を感じられないのだと思います。知識も、元々は誰かの問いから始まっているので、答えに至るまでのストーリーがあります。つまり探究的な見方、考え方の完成品が知識なので、時間の制限はありますが可能な限りそのストーリーも含めて伝えることが大切だと思います。

松尾 子どもたちにはずっと楽しいと思っていてほしいですよ。

続橋 今教員になって子どもたちを見てみると、小学校の頃にこれだけ探究心を持って学べるのはとても貴重なことだと思います。私が小学生の時はそこまで探究という視点で勉強していなかったと思うので、今の時期に思う存分やってほしいです。

佐藤 楽しいからスタートして、

ではなぜそのままのモチベーションが
 中学高校と続かないのかを考えた時に、
 小学校高学年〜中学2年あたりで描写
 の質を上げていく必要があるのではな
 いかと思つたことがあります。なぜ楽
 しいのか、どこが面白いのかを表現で
 きないと、楽しさも深まってこないし
 広がりません。今、教育現場でリフレ
 クション(振り返り)という言葉をよく
 耳にします。生徒が感じたこと、気づ
 いたことをそのままにせず言語化する
 ことで定着させたり新しい気づきを得
 る手法です。他教科においてもそうで
 すが、探究においても自分が感じた
 「楽しい」を言語化し、深化させること
 が大切だと思います。そのために継続
 性、小学校と中学校が連携していく
 ことにはとても意義があると感じてい
 ます。

理科を学ぶことの意義は何か

——これからの社会や未来にとって、
 理科を学ぶことの意義とはなんだと思
 いますか？

佐藤 身の回りの目に見えることはほ
 ぼ全て理科の分野に関連していて、一
 方、電気やDNAなど目に見えない概
 念も理科は扱っています。身近であ
 り、かつ様々な学びや分野につながる
 のが理科だと思います。聖学院には
 Only One for Othersというビジョ
 ンがあります。自己実現にとどまらず
 それを他者貢献にいかすという意味で
 す。その入り口として理科はとても有
 効だと思っています。他者貢献の文脈
 でSDGsを考える際も、最初は水を
 無駄にしないということやゴミの問題
 など身近なことから興味をもつことが
 多いのではないのでしょうか。その最初
 の気づきは紛れもなく理科分野です。
 さらにその事象を深く学び探究するこ
 とで、「なぜ環境改善は実現困難なの
 か。わかっているのになぜ行動できな
 いのか。知ってもらうために自分は何
 ができるのか」という自分ゴト化につ
 ながります。そういう社会や人に貢献
 できる人となるための入り口として理
 科を学ぶ意義があると思います。

松尾 今の佐藤先生のお話とちよっと
 近いのかもしれませんが、生きていく
 上で色々決めたり考えたりする際の、
 材料としての知識と意思決定プロセス
 を身につけるのが理科だと思います。

最近であれば新型コロナウイルスに関
 連したことなどがまさにそうです。
 様々な情報がある中で自分で考え行動
 を決めなければなりません。その時に
 すべての知識を持っていなくても、「こ
 の言葉は聞いたことがある」というス
 タートラインとなる知識と、そこから
 自分で問いを生み出し明らかにしてい
 くプロセスが身につけていければ、雑多
 な情報に囚われずに自分の意思決定が
 できると思います。

ただ、理科だけを勉強していれば良い
 のかという点、それだけでは視野が狭く
 なります。極端な話ですが、遺伝子改良
 を人に施しても良いという考えに至るか
 もしれません。様々な分野の知識を身に
 つけ、倫理観も含め多面的な視点をもつ
 ことが大切です。横断的な学びを通して
 興味や気づきをどんどん広げていく探究
 学習の意義もそこにあると思います。

続橋 私も佐藤先生と似ていますが、
 理科での探究を入り口として、一人ひ

とりが興味関心をもって考えられるよ
 うになることと、あわせて他の人の意
 見に耳を傾けられるようになることが
 これからの社会には必要だと思いま
 す。社会には答えのない課題がたくさ
 んあります。その解決にはいろいろな
 人の考え方や価値観を取り入れること
 が重要です。また、そうして得た力を
 自分のためだけでなく、世界や世の
 中、みんなのために使える人になつて
 ほしいです。その意味でも、探究的な
 学習を小学校からやる意義があります
 し、中学・高校と継続していくことが
 大切だと思います。

(取材日/2021年7月)

※QFT
 Question Formulation Techniquesの頭文字をとつ
 た言葉。学習者は自分の中に問いをもっていて、そ
 れをうまく引き出せればその学習者に最適化された
 問いが生まれるという教育手法。それにより学習者
 自身も自分が何を知らなければならないのか何に興味があるのか
 言語化され探究へとつながります。



女子聖学院中学校の理科の授業。イカの解剖。
 カメラで撮影しているので生徒はモニターで見る
 こともできます。



聖学院中学校の理科の授業。360度カメラ
 (RICOH THETA)を使ったグループワーク。



ワークショップの様子。友だち同士で意見を出し合い、学び合い、教え合いを進めています。[2018年に撮影]

生活科、総合的な学習の時間とワークショップ

子どもたちの興味関心を受け入れ
 どんどん広げていくことが大切

小学校の1・2年生は、生活科において理科と社会を合わせて学びます。身近な地域や生き物から子どもたちが興味や気づきを得る、探究の入り口となる授業です。聖学院小学校では生活科において、ワークショップ的な学びを取り入れています。例えばタンポポを観察する授業。教員が「タンポポには花びらが何枚ある？」と問いをたて、実際にタンポポを見てくることを促します。見てきた児童は「百何枚ありました」「僕が見たのは99枚」など、それぞれ観察した結果を報告します。そして数が違うことで子どもたちの間に対話と問いが生まれ、タンポポへの興味関心を得る機会となります。また教員が「タンポポは根がとても長い」など別の情報を与えると、子どもたちは好奇心を刺激され、どんどん自分で調べようになります。「人が見たからその通りということではなくて、自分でも実際に見に行つて調べたいことを重視しています。子どもの興味の視野はまだ狭いので、まずは興味関心を広げてあげることで、そして楽しい、面白いと感じてもらうことが小学校では大切です」と話されるのは、かつて理科専科も経験された教務主任の木越憲輝先生。

実験道具から興味を広げる

子どもたちは新しい道具が大好きです。理科は様々な道具を使うため、顕微鏡一つとってもそこから興味を広げられます。もちろん道具なので学習の目的ではありませんが、理科は中学、高校と同じ題材を繰り返し学びます。木越先生は「小学校の段階では完璧な理解を求めるより興味を持たせてそのテーマを記憶に残すことが大事です。それが後々、そのテーマへの探究につながります」と話します。



木越憲輝先生

現在4年生を担当しながら、小学校全体の授業や学習に関わる教務主任を務めている。これまでに、3年生から6年生までの理科専科や、1、2年生の担任時には理科の前段階にあたる「生活科」など、様々な学年や授業を経験している。

す。そこからディベートやスピーチ、身体表現を取り入れてみたり、様々な試みを経て、ワークショップ型が定着しました。今では「自立した学び手」を目標に、子どもたちの学び合い、教え合いを推進しています。植物の観察においても、子どもたちがどんどん発言できる環境を作ることによって一人では気づけなかったところまで興味関心を広げることができました。木越先生は「これらの学びを通して、自らの気づきを大切にしながら、自分ごとという人間で何が好きなかを理解し、かつ他人の意見も聞き入れられる人になってほしいです。そうすれば中学・高校で社会課題やSDGsに取り組む際も自分の賜物を軸に、より深く探究できると思います」と語ります。聖学院小学校では、子どもたちのその後の成長も見据え、教員が日々研鑽しています。

理科見学

知っていることも、実際に見ると驚きがある
そこに観察の意味がある



動物園の講義室で骨格標本と糞の観察。草食動物と肉食動物で骨格の動きと、糞がどう違うかを見比べます。

女子聖学院中高には、理科に関する施設を見に行く理科見学という学習があります。中学1年生と高校2年生は生物の観察を目的として動物園に行きます。ただ動物を見るということではなく、観察するテーマがあり、対象となる動物が決まっています。観察しながら記入するワークシートがあり、観察した後は講義室で動物解説員の方から講義を受けます。学習の道筋がきちんと設定された見学です。理科見学が行われる11月頃といえば、中学1年生は授業で生き物の体のつくり、肉食動物と草食動物の違いを学んでいる時期であり、食性と骨格が見学のテーマになることが多いそうです。一方、高校2年生は、生息地と骨格との関係がよくテーマになるといいます。

中学生は草食動物と肉食動物を観察した後、講義室でそれぞれの動物の糞を見ます。その際、肉食動物の糞があまりに臭いので生徒から悲鳴が上がるそうです。餌によって匂いに大きく違いがでることを体感できます。生徒にとっては強烈に記憶に残る体験です。

ペンギンの標本に触らせてもらった際には、ペンギンが鳥だとわかっていながらも、羽毛で覆われていることをあらためて確認し、驚いたと高校2年生を担当された鷲澤結実先生。

中学1年生を担当する松尾知実先生は「生徒は動物がどう歯を使っているのか場所ごとにどう体の特性をいかしているのか、動物の近くでじっくり観察

したことはありません。実際に見るとは、知識としてほんやり知ってたことをより鮮明にしますし、またそこに驚きがあります。この理科見学を通して、見ることの大切さを実感し、同時に自分でもいろいろなことに気づけることを知ってほしいです。それが興味と自信につながっていきます」と語ります。鷲澤先生は「じっくり見た上で比較し、共通点と相違点を見つけ出したり、それらの理由を考えてほしいです。そういうものの見方が身につけば、他の学びや生活の中でも自分で問いを立てて答えを導き出せるようになります」と話します。理科見学のお話を聞いて、観察することは、興味関心につながる学びの重要な出発点であるとあらためて気づかされました。



松尾知実先生と鷲澤結実先生

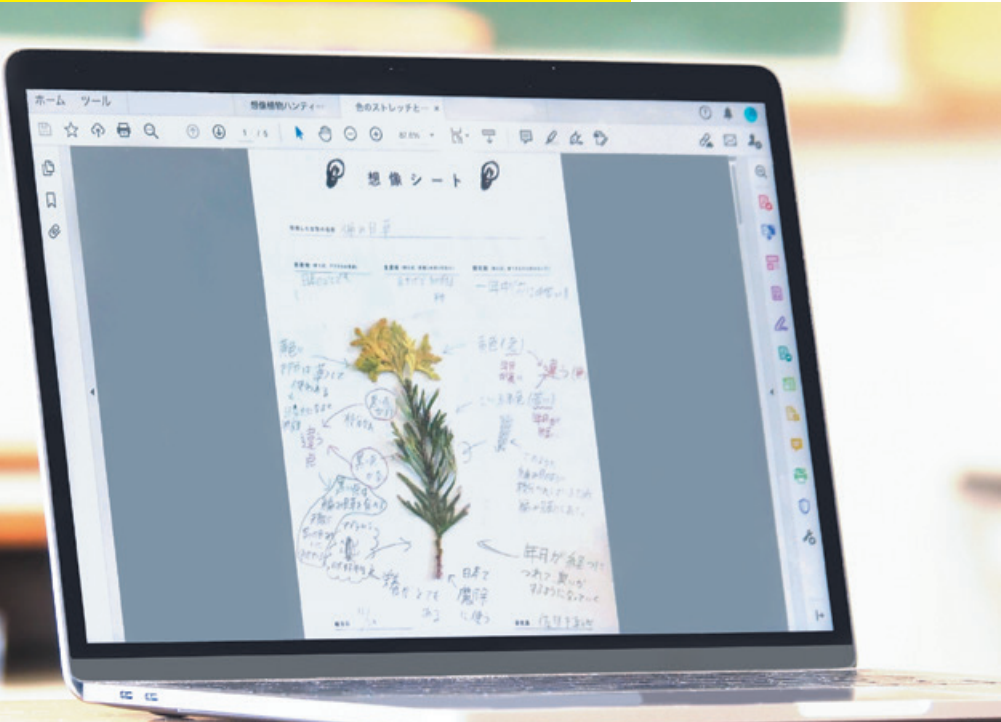


その他の学年の理科見学

中学3年生と高校1年生は国立科学博物館や水処理センターなどの施設に行きます。生物以外の物理、化学、地学などに関するものを観察、体験して学びます。学年ごとに様々な理科の興味が引き出せるよう工夫されています。

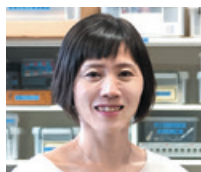
想像植物ハンティング

自分なりの解釈で植物を観察
そこからたくさん気づきが生まれる



生徒が作ったワークショップのシート。たくさんの気づき書き込まれ、興味をもって観察した様子が伺えます。

中学1年生の理科では「植物の花のつくりとはたらき」と「植物の分類」について学びます。いずれも観察を伴う学習です。聖学院中高はこの学習において今年、「想像植物ハンティング」(※)というワークショップを導入しました。「想像植物ハンティング」とは生徒が自分で植物を採取しに行き観察し、見つけた特徴に自分なりのストーリー(解釈)をつけるというワークショップです。ある生徒は葉についている黒点に「鳥の目を模して天敵を遠ざける効果がある」と想像したり、場所によって葉の色が変わり、においが変わるというストーリーを考えました。生息地や開花時期、植物の名前などの設定も考え、それに基づいて想像していきます。植物が生き残るための機能なのではないか、他の生物とどう関わっているのかという視点をもって観察することで細かい特徴を自分で発見していくようになります。「見る楽しさを伝えたいです」とは、中学1年の理科を担当される佐藤充恵先生の言葉です。



佐藤充恵先生

SEL (Social Emotional Learning/対人関係能力育成)

聖学院中高ではSELにも力を入れています。SELとは自分や人の感情に目を向け対話の場を作っていける力を育てる学びです。子どもは自分の感情に目を向けることに慣れていません。それを丁寧にスキルセットすることで対話的な学びをした時に多面的な解釈ができたり新しい気づきを増やすことができます。

※「デザインのとびら」というクリエイティブチームが考案したワークショップ。

いる時も楽しめ、常に頭や心が興味関心や気づきの方に向かっていきます。さらに生徒一人ひとり選ぶ植物もストーリーも違っているので生徒間での対話も生まれます。佐藤先生は「生徒には小さな気づきにも自信を持ってほしいです。気づきは自分のものであり、こつでなければという正解はありません。間違いがないということは否定されることもないということです。また、みんなの気づきを並べたものから見える発見があり、その発見を一緒に喜びたいです。」と語ります。

一般的な授業では、植物の機能や分類に関する学習は知識の習得が中心となりがちです。しかし「想像植物ハンティング」のような体験から入ると、知識に対しても興味や気づきが生まれるのではないのでしょうか。

子どもと環境

子どもの発達を

子どもの感覚と目線で学ぶ



幼少期の経験を思い出し、そこから得られる考察を発表している学生

小学校の教科のように、保育や幼児教育も「健康／人間関係／環境／言葉／表現」という5つの領域に分かれています。この中にある「環境」への導入的な授業が「子どもと環境」です。子どもは自分と世界（環境）をどのように認識していくのでしょうか。例えば、子どもが小石を水に落とした時、ちやぽんちや音がします。この音によって子どもは自分の行動と音の関係に気づきます。石の大きさが変わると音も変わります。因果関係のような科学的概念の基盤が徐々に形成されます。このように、子どもは教えられるのではなく何気ない生活や遊びから概念や思考を獲得していきます。子どもがどのように環境と関わっていくのかを知り、子どもにとって身近な環境とはどのようなものがあるのかを様々な視点から考察していく授業です。

「子どもと環境」では、幼少期の感覚を思い出したり、子どもの目線で考えることを重視し、毎回、自分が面白いと思ったものや子どもが面白いと思うものを見つけて調べる課題が出されます。学生は次回の授業で、調べてきたことをプレゼンテーションします。この課題について担当の佐藤先生は「何もないところから子どもについて考えるのは難しいことです。子どもの感覚と目線になって調べると、それを基盤にして考えることができます。また学生によって経験差があるので他の学生の発表を聞いて共通の基盤を作ること

もできません」と言います。授業ではその回ごとのテーマが、子どもにとってどのような学びにつながっているのかという理論も説明します。幼少期の感覚を理論で補うことで子どもの発達に關するより深い理解が得られます。

「子どもが興味を持ったものではなく、あれ、分類や集合、因果関係などの科学的概念につながります。保育や幼児教育という、学生は教えなければと思いついてしまいがちなのですが、教えるのではなく子どもの興味を広げられる人になってほしいです」と佐藤先生。教えることが、という思い込みが強いのは一般家庭においても同じかもしれません。また時間に追われて子どもが興味を持ったものを見守れない家庭も多いのではないのでしょうか。「子どもと環境」には、保育者だけではなく子どもに関わる全ての人に知ってほしい大切な学びがありました。



カブトムシの飼育

保育者は子どもの命を預かる重要な仕事です。「子どもと環境」では、学生に命について学んでもらうため、保育所や幼稚園で飼われていることが多いカブトムシの飼育を体験してもらっています。受講期間中に、卵から幼虫、さなぎ、成虫、産卵まで観察でき、生き物の命を身近に経験します。



佐藤千瀬先生（児童学科）

輝く人たち

「在校生インタビュー」

1

聖学院高等学校 2年生
 いいお
飯尾 陸功 さん

PROFILE

聖学院高等学校2年生。中学時代はサッカー部に所属。2020年7月より聖学院みつばちプロジェクトに参加。2021年4月に合同会社 And18'sの社長に就任。



自分たちで瓶詰めした生はちみつ(クラフトハニー)。一般的な加熱されたはちみつとは違った味わいを楽しめます。

プロジェクトのメンバーは意志のある人ばかりです

2016年にスタートした聖学院みつばちプロジェクト。「社会と関わる」をテーマに聖学院高校の有志のメンバーによって精力的な活動が行われています。その活躍ぶりはテレビや新聞などで何度か取り上げられていますので、ご覧になられたことがあるかもしれません。学校の屋上で養蜂して採蜜した聖学院ブランドの生はちみつ『クラフトハニー』の販売の他、規格外の果物からジャムを製造し販売しています。みつばちプロジェクトは顧問の相澤先生と在校生、卒業生から成る『And18's』という合同会社を立ち上げました。そして、その会社の社長を務めているのが飯尾陸功さんです。

「同級生や後輩ときちんと話し合っているいろいろなことを決めているので、社長というよりプロジェクトのリーダーと言った方がしっくりきます。」と語る飯尾さん。中学生の時、先輩たちのプレゼンテーションでみつばちプロジェクトを知り、決して安くはない生はちみつが記念

祭で早々に売り切れることに「なぜ？」と興味を持ったことが、プロジェクトに参加するキッカケになったと言います。また、これまでの活動で一番印象に残っていることは？という質問に、自らが中心となつて立ち上げたオンライン販売サイトを挙げる飯尾さん。「自分のやりたいことを自ら提案してそれを形にする。」それは他のメンバーにも言えることで、意志のあるメンバーが揃っていることがプロジェクトの特徴だと言います。そうしたコメントの端々に経営者的な視点や素質があるように感じました。

タイ研修旅行にも参加したことがある飯尾さんの目は世界に向けられています。「日本の内側からではわからないことに、外側から見ることで気づくことができる」とタイの研修を通して学びました。大学は国際系の学部へ進学し、将来、日本の商品を海外で販売する仕事や、日本の技術などを海外に伝える仕事をしたいと考えています。」



学校屋上のグリーンカーテン前にて。このグリーンカーテンも、飯尾さんの発案で今年度より設置されています。

2017
 聖学院中高入学
 勉強の楽しさを知る

2018
 夏期学校
 蝶ヶ岳登山で
 グループリーダーを務める

2019
 タイ研修旅行参加
 世界に興味を持つ

2020夏
 みつばちプロジェクト加入

2020冬
 みつばちプロジェクト
 オンライン販売サイト
 立ち上げ

2021
 And18's
 社長就任

歩む人たち

「卒業生を尋ねて」

7

聖学院中学校・高等学校
聖学院大学政治経済学部卒業
さがた よしひこ
相方 芳彦 さん

PROFILE

聖学院中学校・高等学校、聖学院大学卒業。大学卒業後、リサイクルショップの経営等を経て現在は『讃岐のおうどん 花は咲く』他人気飲食店5店舗を経営、200名以上が会員として登録する飲食店経営者向けオンラインサロンを運営。



TikTokでご自身の経営哲学を語る相方さん。フォローよろしくお願ひします。



『讃岐のおうどん 花は咲く』新中野本店はAIによる来店者数予測を行なっています。

目標は『1日に100万人を笑顔にすること』

「相方くんは、何で毎朝早く学校に来ていたの？」と卒業式の日林田秀彦校長先生(当時)に聞かれたという相方さん。「とにかく学校に行くことが楽しかったです。」と当時を振り返ります。相方さんにとって聖学院中高は『生き方を学んだところ』なのだと言います。

相方さんは、大学卒業以来ずっと会社を経営されてきました。お父様は日本料理店を経営しており、幼い頃から経営者を目指させる教育方針であったと言います。しかし、相方さんの経営者としての歩みはずっと順調であったかといえそうではなく、何度も失敗を経験しました。大学卒業後に始めたリサイクルショップがうまくいかなかった時頭に浮かんだのは、聖書の『隣人を自分のように愛しなさい』(マタイによる福音書22:39)という言葉。「果たして自分の仕事は誰を幸せにできたのか。儲けばかり考えていたからうまくいかなかったのではないか。」そう反省したと言います。そして、美味しい料理を提供して人を

幸せにしたいとの思いで2013年に讃岐うどんのお店「花は咲く」をオープンしました。相方さんがビジョンとして掲げるのは「1日に100万人を笑顔にすること」。1店舗が100人のお客さんを笑顔にしても、1万店舗が必要です。現在は国内で5店舗の飲食店を運営され、ハワイへの出店も決まっています。コロナ禍で取りやめになりました。また、飲食店経営者向けのオンラインサロンの運営をしています。これは同業の経営者たちを精神的に支えたいという思いで発足したと言います。相方さんにとって聖学院中高の1番の特徴は、つながり。卒業して30年近く経った今でも多くの同級生、先輩、後輩、先生との交流があります。つながりは明らかに相方さんの人生を支えてくれています。サロンの基本にあるのもつながり。と、支え合っています。サロンのメンバーは約200名で、その方々の店舗を含めれば100万人の笑顔の目標はもっと近くなると相方さんは笑顔で語ってくれました。

1986

聖学院中高入学
キリスト教に出会い、
哲学を学ぶ

1989

高校時代は
ゴルフ部に所属、
全国大会出場

1993

聖学院大学入学
在学中に
居酒屋を経営

1996

大学卒業後
リサイクルショップを経営

2013

新中野に
『讃岐のおうどん 花は咲く』を
開店

2019

店舗拡大
5店舗を経営

まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学



2021年度ボランティア・ まちづくり活動助成金審査会

6月26日(土)、大学にてボランティア・まちづくり活動助成金審査会が行われました。本審査会は大学同窓会の支援を受けて2015年より実施しており、学生たちが活動を行う上で必要な経済的支援を求め、プレゼンテーションを行うものです。今年度は6団体が申請し、無事全団体の助成が決定しました。また2019年度に続き上尾市社会福祉協議会との共催で赤い羽根募金の助成があり、上尾市立上尾南中学校の生徒4名が審査員として参加しました。コロナ禍で学生たちの活動にも制約がかかる状況ですが、そのような中でも助成金を活用し前に進むという学生の姿勢を感じ取れる審査会となりました。



学校法人聖学院

「社内報アワード2021」で ブロンズ賞を受賞

聖学院NEWS LETTERは、「社内報アワード2021」(主催:ウィズワークス株式会社、後援:東洋経済新報社)の「紙社内報部門(1冊子19ページ以下)」および「紙社内報部門/連載・常設企画」においてブロンズ賞を受賞しました。このアワードは、「目的」「設計」「ターゲット」「情報」「デザイン・ビジュアル」「テキスト」の6項目に基づき、専門家が社内報を審査・表彰するものです。聖学院では学内報として「聖学院NEWS LETTER」を3カ月に1度発行しています(本冊子)。インターナルコミュニケーションの促進を狙いとして一貫教育の魅力を掘り下げ、関係者の皆さんにお届けしています。

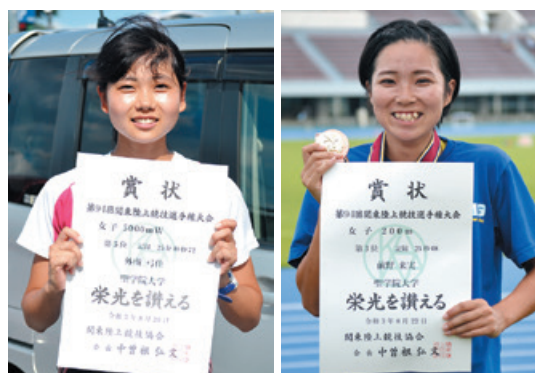


聖学院大学



3位と5位に入賞! 第94回関東陸上競技選手権大会

8月、栃木県カンセキスタジアムにおいて第94回関東陸上競技選手権大会が無観客開催されました。20日(金)の女子5000m競歩決勝に出場した外所弓佳さん(児童学科3年)は猛暑の中25分40秒72で歩き5位入賞を果たしました。22日(日)の女子200mに出場した前野来実さん(児童学科3年)は予選1位、準決勝2位で通過し決勝において25秒08で走り3位銅メダルに輝きました。前野さんは9月に埼玉県熊谷で開催される日本インカレに出場します。これからの2人の活躍に、皆様のご声援をよろしくお願いいたします。



真夏のチャペルに響く 美しい歌声

女子聖学院では毎年8月の第1土曜日に「1DAY説明会」と称し、AM/PM/ナイトの3部構成で説明会を実施しています。コロナ禍にある今年度、8月7日(土)はAM/PMではハイブリッド形式で「ミニ説明会」を、ナイトにはオンライン配信で「チャペルコンサート」を企画しました。「チャペルコンサート」では音大を目指す在校生、芸大へ進学した卒業生が、それぞれ女子聖でのエピソードを語り、音楽で届けたい「感謝」の気持ちと共に演奏を披露しました。

演奏の最後にはパイプオルガンの響きと共に「いつくしみ深き」を讃美し、コンサートを終えました。



2030SDGsゲーム ～LEGO® SERIOUS PLAY®を行いました

7月19日(月)と20日(火)、中Iの生徒たちを対象に『2030SDGsゲーム～LEGO® SERIOUS PLAY®』を行いました。SDGsの基本理念である「誰一人取り残さない」という考え方や世界観を、カードゲームやLEGOのワーク体験を通して体感し、自分と世界との繋がりや、自分と社会課題との繋がりに気づき、学びを深めることを目的としたワークショップ型プログラムです。こども国連環境会議推進協会の井澤友郭先生と聖学院中高の児浦良裕教諭が進行役を務めてプログラムが進みました。2030SDGsゲームは、自分たちの取引によって、地球や社会がどう変化していくかを体験できるゲームです。生徒たちは2人で1チームを組み、他のチームと交渉したり連携したりしながら、チームごとに設定した目標の達成を目指します。ゲームを通してSDGsを達成していくために必要なことを学びました。LEGOブロックを使った振り返りでは、生徒たちはゲームを通して体験したことを自ら言語化することによって、深い学びを行うことができました。



聖学院小学校



放課後NPO主催 アフタースクール／岩隈久志さんがやってくる!

8月4日(水)、聖学院アフタースクール特別企画として、メジャーリーグ シアトル・マリナーズ 特任コーチの岩隈久志さんが来校されました。岩隈さんの姿が見えると、集まった子どもたちからは大きな歓声が沸き上がりました。新型コロナウイルス対策を徹底した上で、前半は岩隈さんから抽選で子どもたちにボールがプレゼントされ、また全員参加のクイズ大会が行われました。後半は岩隈さんとのキャッチボール体験と、お礼メッセージの作成が行われました。最後は岩隈さんと集合写真を撮影し、子どもたちにとって素敵な一日となりました。



聖学院みどり幼稚園



お泊り会

7月2日(金)から翌3日(土)にかけて、年長さんたちのお泊り会を行いました。当日は雨が降ったりやんだりのあいにくの天気でしたが、園庭での夜の花火は雨に降られることなく皆で楽しむことができました。夕食のカレーライス作りは、お米を研ぎ、野菜を切って皆で仲良く調理しました。お泊り会の当日はお店屋さんごっこの準備を行い、小さい学年のお友だちに提供する品物などを楽しく作成しました。後日行ったお店屋さんごっこでは、どの学年の子どもたちもとても生き生きとしながらお買い物を楽しみ、どのお店も大盛況でした。お友だちとお泊りが初めての子どもが多い中、ドキドキながらもお布団をお友だちと仲良く協力しながら敷くことができました。翌日の終わりの会では、普段と違う体験を通して、達成感を味わい自信をつけた子どもたちの姿を保護者の皆さまに感じ取っていただけたのではないかと思います。



聖学院幼稚園



気分は小学生！ 5年生との交流会

7月12日(月)、聖学院小学校5年生と年長組の交流を行いました。5年生が年長さんをエスコートして校内を案内しました。このイベントは毎年行っており、来年小学生になる年長さんが小学校を楽しみに思うきっかけにもなっています。教室を見学させてもらったり、写真を撮ったり、廊下の展示を見てまわりました。お互いにとても充実した楽しいひと時となりました。



聖学院大学の
守衛さん

支える 人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに
聖学院への想いを伺ってみました。

No.
01

野村不動産パートナーズ株式会社

高野雅明 さん

2011年、聖学院大学が建物管理を委託している野村不動産パートナーズ株式会社に転職し、以来10年間聖学院大学の守衛を務める。いつも正門で明るく挨拶をしてくれることで大学の教職員、学生から親しまれている。



聖学院大学は誰であれ分け隔てなく接してくれる、だから私も自然と笑顔になります。

聖学院大学には、いつも明るく挨拶をしてくれる守衛の方がいます。高野雅明さんです。「本当はビジネスライクに接するのが守衛として本来のあり方だとは思いますが、自分は徹底できないので」と笑って話します。高野さんは10年前に聖学院大学の守衛に就任、以来夏も冬も正門に立っています。教職員、学生に親しまれている高野さんに、聖学院大学を見守り続ける視点について伺いました。

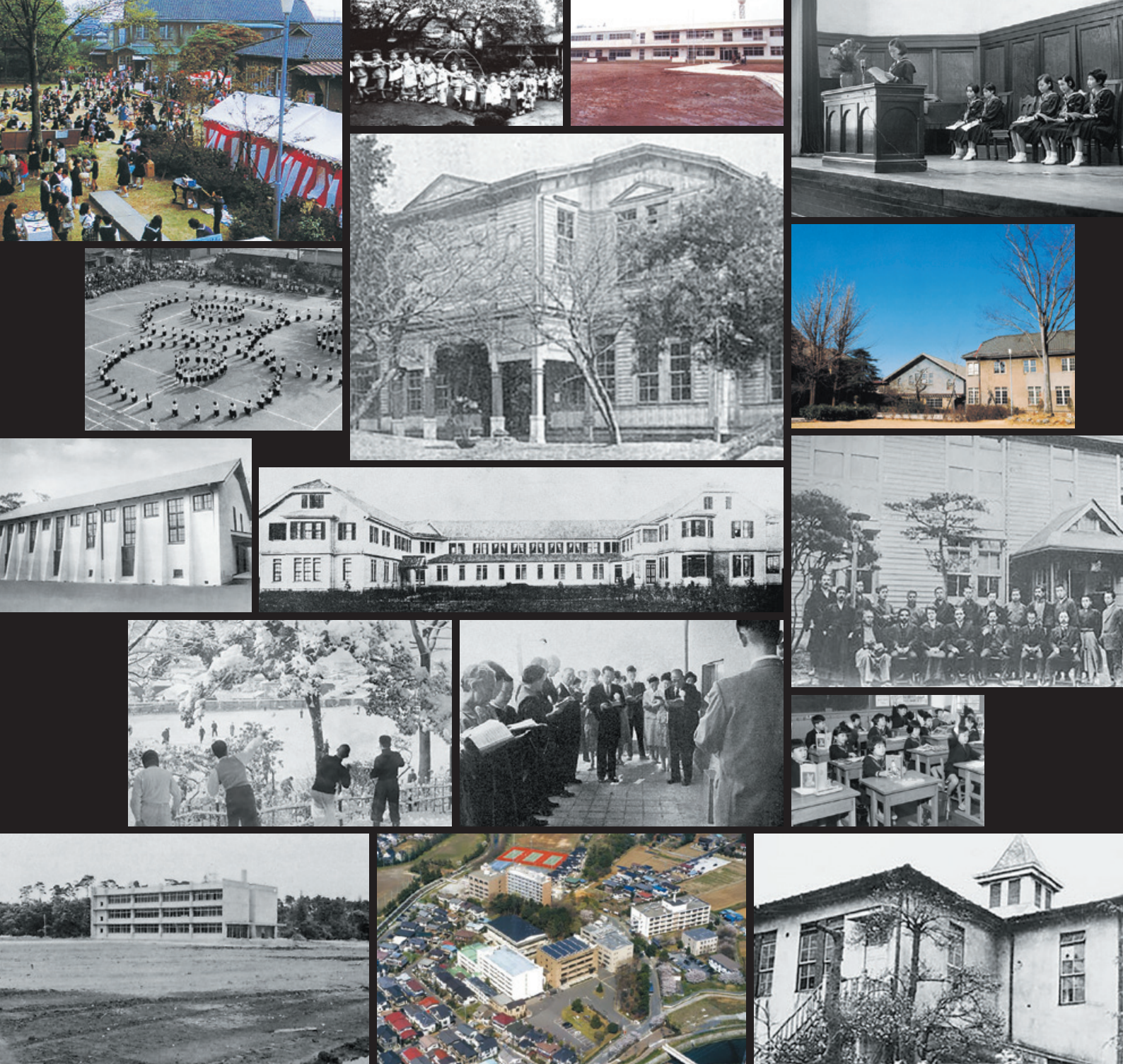
「守衛の主な業務は、建物の解錠、施錠と立哨(正門で立って警備をすること)です。早朝7時半から夜は22時半まで、交代で勤務しています。どれも重要な業務ですが施錠・解錠の巡回時、火の気には特に気を配っています。聖学院大学の教職員・学生の方々とは入校時の挨拶と施設の鍵の受け渡しが必要な接点になります。教職員の方も学生の方も、挨拶をするとちゃんと返してくれますし、私の名前を覚えていて話しかけてくれる方もいます。誰であれ分け隔てなく接してくれる、それが聖学院大学の印象です。図書館側の守衛室に、記帳台が熱くなりすぎないようにバラソルを立ててくださったたり、行事

の誘導サポートをご依頼いただいたり、職員の方々には一步踏み込んで接して下さっているように感じ、それがまた嬉しくもあります。だから私も業務以上に聖学院大学のことを身近に感じています。

元々私は人に話しかけるのが苦手でした。しかしこの仕事を通じて、挨拶をすれば返してくれる、そこからコミュニケーションが生まれると知り、今では自ら進んで挨拶をしています。

学生に対して思うことは、やはり大学に来られるようになって良かったということでしょうか。去年1年間、コロナ禍で学生が大学に来られない期間がありました。キャンパスでの授業が再開され、正門の前で友達と待ち合わせをしている姿を見ると一人の人間として心が温まります。そして『無事に戻ってこられて本当によかったね』と思います。」

1年間学生がいない正門を見続けてきたからこそその視点かもしれません。最後に「それ以上のことはできません」と遠慮がちに付け加えた高野さん。学生一人ひとりを温かく見守ってらっしゃる様子が伺えました。



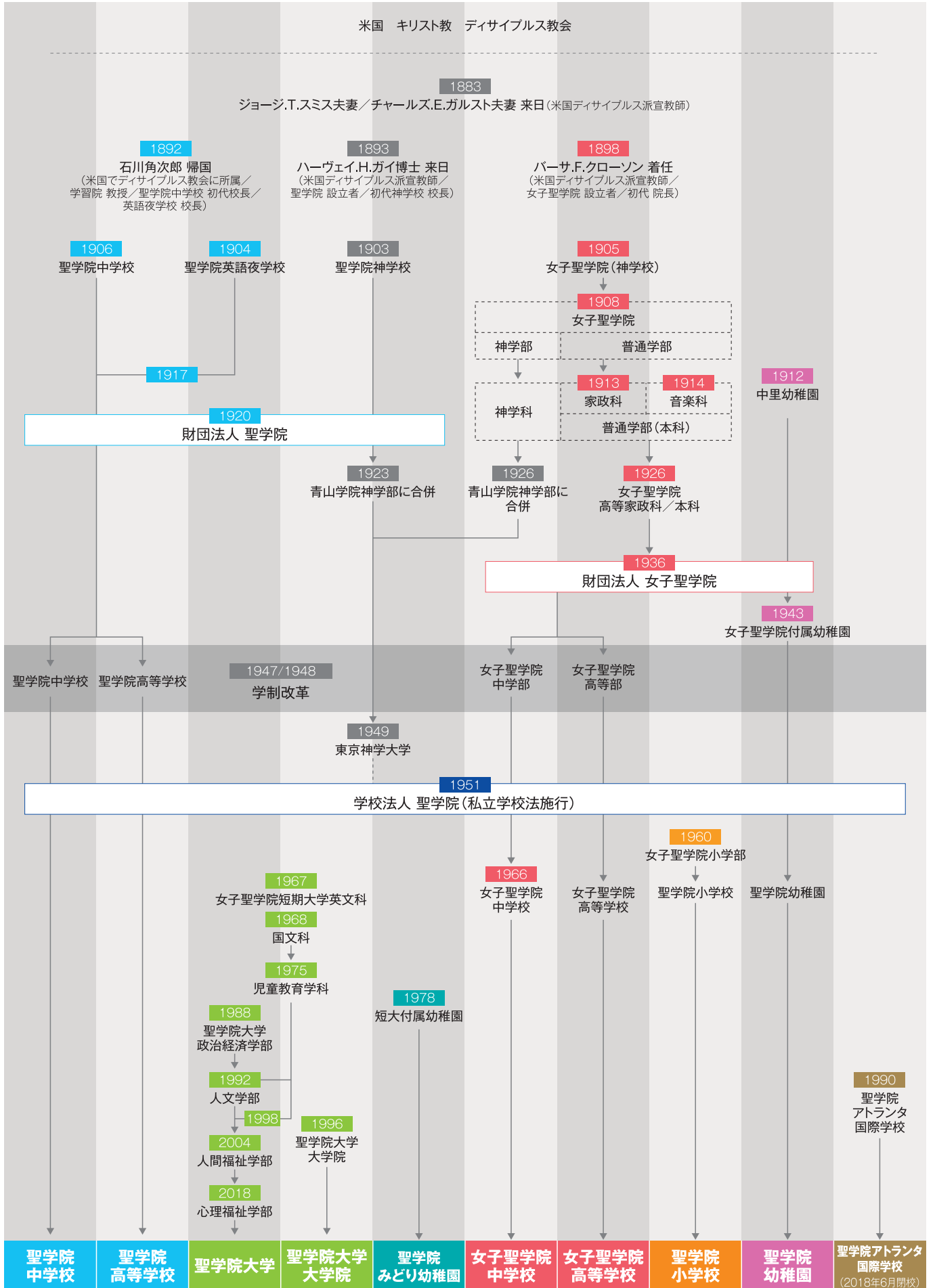
SEIGAKUIN 120th

2023年、聖学院は創立120周年を迎えます

1903年に神学校として生まれた聖学院は、現在では幼稚園から大学院まで合わせ、約4,600名の園児・児童・生徒・学生が通う学校法人に成長しました。その時の流れの中、「神を仰ぎ 人に仕う」という建学の精神は脈々と受け継がれ、人に、社会に、世界に貢献する人材を輩出し続けています。

聖学院の歴史

History of Seigakuin University & Schools



聖学院歴史探訪

#14 聖学院教育の歴史

-敬神・奉仕-



「敬神、奉仕」とは、実に明確な、根源的な、凝集した表現であります。この求心的な把握を人は狭すぎる考え方で誤解するかもしれません。しかし、この凝集した精神は無限に広い教育理念の外延を包んでいるのであります。その例証として、平井庸吉の「予が希望」という文章をあげてみましょう。

「一、自修の精神を盛んに為したい。……自ら克苦勉勵して得たる智識でなくては価値はない、自己のものとはならぬ。この学院に於ては事情の許す限り、自修の時を與へて自分で研究し自得するやうに為したい。

……

五、靈育に最も重きを置きたい。学校内に敬虔なる空気の充滿して、学生は無意識に靈気を呼吸するやうに為したいものである。世間靈育に注意して居る学校は実に寥々たるものである。……」

これらは、「神を仰ぎ、人に仕う」精神から噴出する人間形成への目標であります。キリストの弟子としての純潔で高邁な資質の訓練を教育課題としております。現代的に表現すれば、人格的自己の自由と責任、協働と奉仕、それらを収斂する敬虔、ということであります。

(次号に続く)

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版(出典より一部変更)

学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科 日本文学科 児童学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水 正之 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究所／文化総合学研究所／心理福祉学研究所
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／赤田 直樹 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／伊藤 大輔 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／山口 博 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／田村 一秋 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード (VISA、MasterCard) をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530 (月～金 9:00～17:30)

